

贈ることば

ノートルダム清心高等学校 加藤すみれ

私の姉は馬鹿だ。私の十七年という、さして長い訳ではない人生の中で出会ってきた人で、姉より馬鹿な人はいなかった。因みに、私には姉が二人いるが、馬鹿なのは上の姉のほうで、もう一人はどちらかと言えば、阿呆だ。

私がこの世に生を享けたとき、姉は既に七歳だった。姉が小学校に通う姿はおぼろげにしか覚えていない。強く印象に残っているのは、習い事のバレエに熱心に通っていたことぐらいだろうか。

姉が中学に入ってから結構、覚えている。当時の私はまだ六歳。中学生の姉はよく泣いていた。まず、勉強ができなかった。英語が特に理解できなかったようで、三単現のSや関係代名詞に泣いていた。姉は、高校受験に必死だった。大好きだった習い事も、泣きながら先生に辞めると告げていた。

高校生。姉は見事、第一志望に受かった。テニス部に入ったようだが、如何せん肩がポンコツだった。中学の陸上部では、織田幹雄の大会に出られるくらい速かったのに、(その大会は前日にこけて捻挫し、出場できなかった) 何故、一勝もできないテニス部に入ったのかというと、日焼けしたくないから、だそう。中学生まで、姉は走っている時は日焼けしないのだと、小麦色で笑いながら本気で言っていたが、高校生になると屋外では日焼けすることに気づいたらしい。お姉ちゃん、帽子だけじゃ日焼けは防げないんだよ。高校生になっても、頭は悪いままだった。

大学受験は失敗した。滑り止めの滑り止めの大学に入学した。入学後の一週間は、退学も考えていたほどその大学を嫌がっていた。しかし、それも一週間で終わった。一人暮らしも満喫しているようだった。小学校六年生だった私は、毎朝モーニングコールをかけていた。五回電話しても起きない日もあった。なんて健気な妹なのだろう。

就職は、長年夢だった職業についたが、あと半年で辞めるそう。ずっとそれを目標に頑張ってきたのに、現実には、そんなものなのか、二年で満足してしまうのか。辞めると聞いたとき、大学や部活と一緒に、そんなことをずっと言いながらも続けるだろうと高を括っていた。

今年の五月、姉が久しぶりに帰ってきた、婚約者を連れて。別に驚きはしない。以前、何度か

会っていた。そうだろうな、と思っていた。その人は、いい人だった。こんな好青年が世の中にいたのかと思った。姉は無邪気に言う。

「すみちゃん、絵、得意なんじゃけん、私たちのウェルカムボード描いてね」

私が断らないと信じきっている。描きたくないよ。結局とりかかり始めたのは、夏休みに入ってからだった。とりあえず、人の絵から描こうかと、姉の顔を描いてみた。

気持ち悪い。

こんな穏やかな微笑みをする人ではない。全力で、笑うか、泣くか、怒るかぐらいしかない人だ。

ぼんやりと、これまでの姉を思い出していた。習い事のバレエは、家で練習していた。私は二年足らずで飽きていた。姉と一緒に辞めると言いに行った際、姉は最後まで引き留められていた。バレエ経験が効いたのか、姉は大学ではフラメンコ部を楽しんでいた。中学、高校と毎日部活があったが、部活後はずっと勉強していた。私は、塾の自習室にいる姉を母と車で迎えに行く係だった。塾の先生はいつも私にお菓子を用意していた。嫌いだった英語も克服して、外国語大学へ行った。スペイン語も話せるようになっていた。その大学で、例の婚約者と出会った。念願の客室乗務員にもなった。来年の春には、仕事を辞めて、婚約者のいる浜松へ行く。

写真を見ずに、姉を描いた。

幸せだと言わんばかりの笑顔だ。写真を撮って、姉に送ってみると、もっと可愛くしろと言われた。姉の鏡には魔法がかかっているようだ。

婚約者のほうを描くのも一苦勞だった。画面越しに姉に文句を言われながら、描いては直すのを繰り返した。描き始めてから四時間経っていた。仕上げに、二人の周りを花で染めた。幸あれ、と。

姉は、私がどんな気持ちでこれを描いているのかなんて知らないのだろう、馬鹿の考えることは分からないが、馬鹿は人の考えることはもっと分からないにちがいない。七つも年上で、一度もケンカをしたことがないくらい、遠い存在だった。どこまで先へ行けば、気が済むのだろう。結婚して、姓が加藤じゃなくなり、新しい家族を紡いでいくのだろう。

姉は馬鹿だ。私が、さみしいと思っていることに気づかないのだから。

お姉ちゃんのばか。

(広島県呉市)

【無断転載を禁ず】